

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	上野 和昭
論文題目	平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究

審査要旨

本論文は、『平家正節』を中心とする平曲譜本を主たる資料として、近世京都アクセントの共時体系を明らかにするとともに、その体系が日本語アクセント史上にどのような位置を占めるものであるかを考察し、室町期以降の日本語アクセントの史の変遷を鳥瞰的に把握することを目的としたものである。

論文は、序章と終章を前後において、本論として全八章から成る。

序章では、本論文が扱う問題について、前提としての概括的な整理を行い、アクセントの定義、アクセント史研究と方言アクセントの関係、平曲譜本の資料的位置づけなどについて、基礎的なまとめを行っている。

第一章では『平家正節』をアクセント資料とするうえでの諸問題を具体的に確認している。譜記の種類とアクセントとの関係、助辞や接辞の付いた形式から語単独のアクセントを認定する方法などが確認され、本論文の以下の記述の基盤を着実なものとしている。

第二章から第五章までは名詞のアクセントを取り上げる。第二章では単純名詞と転成名詞、第三章では複合名詞、第四章では固有名詞、第五章では漢語が扱われている。語構成や語種等によって分類したうえで、それぞれの区分のもとで留意すべき事項に注意を払いながら、平曲譜本における名詞アクセントの実態が明らかにされており、先行研究の概括的なとらえかたでは正確な事実の確認ができなかった点について修正を加えるものなどを含めて、新たな事実の指摘が多い。

第六章では動詞のアクセントを取り上げる。動詞におけるアクセント型の統合過程、動詞の接続におけるアクセントの実現からみた複合度の認定、「特殊形アクセント」とよばれる「ス・サス・ル・ラル」などの助辞が接続した場合のアクセントのとらえかたなどの諸問題が方言アクセントを対照しながら論じられており、室町期以降のアクセント史の中で、近世をどのように位置づけるかという判断の基準として、動詞アクセント体系が重要であることが確認されている。

第七章では形容詞のアクセントを取り上げる。変動の著しい室町期以降の形容詞アクセントについて、複合形容詞や形容詞型の活用をする助動詞などを視野におさめつつ、型の統合と体系への類推という二つの力を想定することによって、変化の方向に対して統一的な解釈を与えようとしている。

第八章では、平曲に関わる伝書を取り上げ、諸本の内容や特色について論じている。平曲諸本等から得られたアクセント史に関する知見にもとづいて個々の伝書を見直すことによって、改めて平曲の資料的位置づけを確認するものである。

終章では、まとめとして、日本語アクセント史において近世をどのように位置づけるべきかが検討、整理されている。大局的にみれば、アクセント史上の「近世」は「中世」に包摂されること、そのうえで、「型の統合」の進行の状況からみるならば、やはり「近世」は「中世」の前半とは別と考えるべきであるとし、本論の第一章から第八章までで確認してきた名詞、動詞、形容詞等のアクセント体系の状況をふまえて、改めてアクセント史上に「近世」を設定することの意味を提示し、近世アクセントの特質を「伝統性」と「同時代性」の交差としてまとめている。

本論文の特色は、まず、日本語アクセント史に対する知見と理論に支えられた綿密な資料調査と事例の収集、整理である。平曲譜本の譜記の読み取りと解釈が着実に行われ、そこから帰納された近世京都アクセントの体系を信頼度の高いものとしている。近世京都アクセントの資料は必ずしも多いとはいえないが、その中であって、平曲譜本中の「白声」「口説」をこの時期のアクセント資料として扱うことについての慎重な確認の手続きと、語ごとの綿密なアクセント認定の作業とをふまえ、近世京都アクセントの実態が明らかにされている。本論文が取り

氏名 上野 和昭

上げる平曲譜本は、『平家正節』以外の多くの写本にも及んでおり、少数の伝本のみにあられる特殊な譜記や誤写等に対しては慎重な態度をとることが可能になっている。また、研究の前提として、『平家正節』の声譜つき語彙索引が作成されていること、それによって、常に全体への目配りをふまえながら、信頼度の高い事実の確認と論の展開を行うことが可能になっていることも指摘しておかなくてはならない。

そのうえで、日本語アクセント史に対する大局的な見通しをふまえ、現代の諸方言のアクセントの状況を参照しながら、近世京都アクセントを日本語アクセント史上にどのように位置づけるべきかについての提言を行っているが、アクセント史上の「近世」が大きくは「中世」に含まれると解すべきものであること、しかしながら、「近世」には狭義の「中世」とは異なる変化の方向が認められること、そこには中世的なアクセントを残した「伝統性」と、新たな変化の方向を反映した「同時代性」が並存していると考えられること、などを指摘したその内容は、日本語アクセント史上の「近世」の位置づけとして、十分な説得力を持つものといえよう。

近世京都アクセント体系の記述とその史的位置づけの両面において、本論文は、金田一春彦、奥村三雄等の諸氏によって開拓、展開されてきた平曲譜本による日本語アクセント史の研究に寄与をなすものとして高く評価することができる。

以上の通り、本論文の内容は、「博士(文学)」の学位にふさわしいものであると判定する。

公開審査会開催日	2010年 1月 27日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高梨 信博
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	古屋 昭弘
審査委員	早稲田大学・名誉教授	博士(文学)早稲田大学	秋永 一枝
審査委員			
審査委員			